

田向 竹夫（たむかい・たけお）

1、プロフィール

歌人。学生時代に北原白秋の「多磨」に入会。その後、木村捨録に師事し「霸王樹」を経て「林間」創刊に参加。定型尊重、素朴平明、声調の美の歌を追求した。

<生没>

1919(大正8)年1月27日～1999(平成11)年3月17日

<代表作>

『硝子戸』『繖形花』『玄き土』『小世界』『すたれたる』『訳注八戸漢詩選』

<青森との関わり>

八戸市生まれ。戦後、大山仙遊らと青森県歌人協会を結成。昭和59年康土短歌会を結成主宰する。

2、作家解説

本名は竹雄。学生時代に北原白秋の「多磨」に入会。以後一時中断するが戦後復活「霸王樹」「短歌新人」各同人を経て、昭和24年「林間」創刊に参加、以来50年間有力な同人として活躍した。

県内においては戦後、大山仙遊らと青森県歌人協会(現青森県歌人懇話会の前身)を結成、「青森歌人」「年鑑」を発行、県歌人の結集に努めた。一方同人誌「未耕地」を編集した。八戸移住後は奈良兵亮の「氷淡」客員、昭和59年康土短歌会を結成し主宰する。また漢学者でもあり、『訳注八戸漢詩選』がある。

昭和41年頃から運動失調症(難病)におちいりながら、青森県、八戸市の短歌の発展と普及に尽力し、青森県歌人賞、青森県歌人功労賞、八戸市文化賞、八戸市文化功労賞を受賞した。

竹夫の歌は、定型尊重、素朴平明、声調の美をなして、質実で落ちつき、把握も表現もじつに的確で力がある。

木村捨録は『すたれたる』の序文に「君の作品は、天性の美しい感覚をもって生活の些細なる素朴をとりあげ、単純な把握に複雑な翳を宿らしめながら、美しく静かな造型を試みている。漢学者の君をもってすれば、恐らく老荘、李杜の神仙に通うところの詩境であろう。神仙に通うということは、日常の機微から離れるというのではなく、飽くまでも緊密な措辞と結びつくところの詩境なのである」と記している。

3、資料紹介

○『すたれたる』

図書

1989(平成元)年8月20日

195 mm × 135 mm

八戸市文化賞と古希を記念して発行。昭和57年から63年までを年代順に小題を設けて、著者自選の467首を収録する第5歌集。

木村捨録の「序文」、著者の近影、著者小歴、あとがきを掲載している。